

東亜同文書院生の台湾旅行にみる「台北」像

Images of Taipei (Taihoku) Seen by Toa Dobun Shoin Students

塩山 正純

SHIOYAMA Masazumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shioyama@aichi-u.ac.jp

摘 要

東亜同文書院大学は近代に上海に在る日本学校、該校の學生は卒業之前都必须得做一項称为大旅行の現地調査。該調査の主要目的地为中国国内或其周围地区、但由于受到当时各种时代因素的影响、有部分学生放弃原来想去的目的地、赴台湾地区做调查。本文以当时學生们在台湾做调查时描写的日记体记录（大旅行志）为核心资料、初步探讨近代日本知识青年对台湾、尤其是对台湾的“首都”台北的印象和他们在台北的活动实相。

1. はじめに

東亜同文書院の大調査旅行には、南方を主な目的地とするコースも多数あり、自ずと香港を中継地として経由するが多かった。塩山正純（2017）では、書院生の本拠地・上海にならぶ当時の東アジアにおける一大国際都市たる香港について記した『大旅行誌』の滞在記録をもとに、各々が自由なスタンスで書き留めた見聞から当時の日本知識青年の「香港像」の一端を考察した。大調査旅行の調査対象地は主として中国本土もしくはその周辺であったが、諸事情により台湾に立ち寄るコース、または台湾そのものを調査対象とするコースも儘あった。そしてその多くは「首都」の台北を通過している。中国本土、南

方の緊張感みなぎる記録とはひと味違い、一見すると時間の無駄遣いにもみえる台北における短い滞在のゆるく、気楽な見聞の記録ではあるが、当時の知識人である同文書院の若者たちが台北をどう過ごしたのか。当時さかんになりつつあった近代的な観光旅行の記録とはひと味がう切り口で、我々の眼前に当時の台北の様子を蘇らせてくれるのである。彼らが海外の日本領である台湾、とりわけ当地の「首都」である台北で見るべきもの、見たいものは何であったのか、そしてその訪問によって台北の様々な事象にどんな印象をもったのか。本稿は、同時代の旅の記録である紀行文、写真帖、役所による公式記録その他の資料とも比較しつつ、『大旅行誌』に記述された書院生の台北滞在の足跡を辿ることによって、書院生の「台北」像の一端を紹介しようとするものである。

2. 時代と旅行そして旅の記録

明治維新後に日本は「富国強兵」「殖産興業」「文明開化」といったスローガンのもと近代化を目指し、人々の暮らしの周辺も従来からの東洋的な文化に新たに西洋的な文化が混在する二元的な状況が生まれ、さらに第一次世界大戦を経て、サラリーマンや職業婦人といった新しい就労スタイルも生まれ、都市圏における人々の生活も近代化され、しだいに豊かになりつつあった。そういう時代背景とも相まって、大正から昭和初期にかけて上流階級のみならず一般大衆にいたるまで、娯楽・教養のカテゴリーとしての「旅行」文化が根付いていった。赤井正二（2016）が指摘するように、大正昭和初期に旅行文化が「新しい美と感動の発見、自己目的化と多様化、旅行者の事業者への依存」の三つの方向への発展によって特徴づけられるように大衆の規模で実現・普及・定着していくのである¹⁾。これとほぼ時代を同じくして、東亜同文書院でもその特徴的な教育法の一つとして中国大陸を中心に東アジア、東南アジアを調査旅行するフィールドワークである「大旅行」が始まった。古来、ひとが旅にでると何かを記してきたが、日本の旅の記録はおもに「個人的」な形式と内容を色濃くもつ『道中記』の分厚い伝統をもつ [赤井正二 2016: 116] といわれる。書院生の記した『大旅行誌』や、同時代の旅の記録である著名人や職業軍人などによる紀行文、写真帖などはこの系統にあたる。一方で、旅行文化の定着とともに、「平均的な旅行者」を対象としつつ行われる多かれ少なかれ計画的・組織的な共同作業の産物である近代の「非個人的」なガイドブックが生まれたが [赤井正二 2016: 116]、鉄道院などの出版するガイドブックや役所による公式記録その他の資料等はこれにあたるであろう。

1) 赤井正二（2016）6-8頁参照。

3. 行き先としての台湾

近代の旅行文化の定着とともに、「国内」である台湾も観光旅行の行き先の一つとして数えられて観光ガイドブックにも掲載されるようになった²⁾。一方で、東亜同文書院の書院生にとって、「旅行」はレジャーではなく、中国の大陸本土、南方などを行き先とする学業・研究の一環で卒業年次の正課の集大成であったが、様々な事情があったにせよ当時、日本国内であった台湾も行き先の一つであった。訪問回数については、『東亜同文書院大旅行誌』に記載された約630路線のうち、台湾を含む路線は78個確認することができ、全体の12%ほどが何らかの形で台湾の地を踏んでいることになる [岩田晋典 2015: 62]。台湾訪問の割合が増加するのは大旅行の「制約期」(1930年代)にあたり、日中関係の悪化により中国大陸における大旅行の実施が困難かつ限定的になっていく時期で、その結果として、台湾を訪問するコースが増加したという背景の可能性も指摘されている [藤田佳久 2011: 67-69、岩田晋典 2015: 62]。78個の台湾訪問の回数は、あくまでルートに掲載されているものをカウントしたということであって、それは台湾が主要な調査目的地である場合と、例えば、「私たちの旅行は南支でした。コースは香港より広東へ汽車で行き又香港へ舞ひもどり、それから汕頭厦門を経て台湾に渡つたのです」[誌 26: 203 (31期 1934)³⁾]、「広東から学校(上海)へ帰る途中、船の都合で台湾を再び通る事になった」[誌 32: 241 (38期 1941)]、「広東よりの帰途、船便の都合で台湾に十数日を過ぎねばならなくなつて」[同前]というように、単なる通り道における寄港である場合との2通りあった。

いずれにしても、台湾は当時、日本国内であり、上述のように戦争の影響により「大旅行」のコースになったりもしたが、中国を志向して同文書院に学んだ書院生たちにとって「日本」の台湾は、中国ではない、いわばおまけの行き先であった場合が多い。しかし、また同時に、「今日は愈我大日本領土に足を入れるかと思へば勇躍を禁ずる能はずだ」[誌 5: 374 (9期 1911)]、「憧憬した台北」[誌 11: 285 (15期 1917)]、「俺は日本人としての自由天地を渴望焦慮して居た、特に台湾なる一語は自分の耳朶に一層強く影いた、夫以来其の名を思ふ時、一身の憂愁とか心労を忘れ心気一転、恰も戀の歡喜に酔ふた人の様に夢中に憧憬れた、実に台北と云ふ未知未見の美麗な小都は、旅行前の光明であり、愛着の焦点であつた」[誌 12: 297 (16期 1918)]、「今やこの小巴里が孤独なる遊子の足下になつ

2) 例えば本稿でも同時代資料として紹介する朝日新聞社(1933)『最新日本名所案内』、鉄道省(1934)『観光地と洋式ホテル』、台湾博覧会協賛会(1935)『台湾の旅』、台湾総督府鉄道局鉄道部(1937)『台北とその附近』、台北市役所観光係(1938)『観光の台北』など多数ある。

3) []内は引用文が掲載された『大旅行誌』の巻とページを表しており、例えば[誌 26: 203 (31期 1934)]は『大旅行誌』の第26巻203ページ(第31期生1934年の記録)からの引用である。以下同様。

た深切に労つてくれるために、俺の心は千々に砕け、途方もなく迷ふて、正確なる安定を保つことが出来ない」[誌 12: 297 (16期1918)] といった記述に見られるように、海外の日本領として憧れの地でもあったのである。

4. 彼らは台北に何を見て何を書いたのか

では、実際に基隆をはじめとする港に到着し、そこから台北に入ったとき、書院生はどう歩き、どこを訪ね、台北に何を見て、何を書いたのか⁴⁾。

4.1 台湾到着の記述

まずは台湾到着の第一印象から見てみると、「初めて日本の植民地と名の附くものを見て好奇の眼を輝かす」[誌 13: 266 (18期1920)]、「上陸して嬉しく感じた事は、日本気分の溢れてみるといふ事である」[誌 15: 685 (20期1922)] というように、書院生の台湾への第一歩は、一様に日本の植民地に初めて上陸する高揚感に溢れている。しかし、その高揚感も束の間、すぐにテンションの下がる思いをする。『大旅行誌』に記されているのは、「基隆について目に付いたのは税関官吏まで金筋に短剣をさげて居ることで無暗に官僚的のやうな感じを与へしめ」[誌 11: 375 (15期1917)]、「一行は二人の私服憲兵に、薄気味悪くも馴々しく問ひたゞされ、そのあまりのしつこさと猜疑的な態度とに、台湾への第一印象ひどく害され」[誌 24: 433 (29期1932)]、「このの巡查の一行の取調らべが、実に面倒なのです。昨年話は聞いてみましたが、とても、きびしく訊問するのですよ」[誌 26: 219-220 (31期1934)]、「正午近くまで、例の甚だ、むかつく税関検査をうける為に、脚が棒になる程たちんぼを喰はされて、「なんと日本への第一印象の不愉快なことよ」と云ふ気持で胸が一杯になつてゐた」[誌 24: 433-434 (29期1932)] など憲兵、巡查、税関官吏の自分たちに対する振る舞い、扱いに対する不満であって、数多くの訪問で官僚的なものへの嫌悪感が吐露されている⁵⁾。本稿が同時代資料として挙げている幾つかの旅行記・紀行文はいずれも日本国内から台湾を訪問したものであるが、書院生の記述と内地からの訪問記が官僚への嫌悪感をとくには記していないのとは実に対照的である。

4) 書院生が街歩きで訪れ、実際に目にしたであろうと思われる景色、とくに建造物については、例えば片倉佳史 (2015) に多数掲載されており、本稿で引用した書院生による記述と重ね合わせて見ることができる。

5) このほか「要するに我等停船中の如き検疫官とか何とか云ふ金筋のある連中は消毒も碌々せずに行つて来てゐながら糧食運搬に來りたる人夫が許なく乗船したるの故を以て生等同様監禁の身となりたるが如き官僚の横暴及杓子定規の然らしむる所ならん」[誌 13: 409 (18期1920)] などの記述もある。

4.2 いよいよ台北へ、台北到着の記述

さて、実にむかつく憲兵、巡査、税関官吏とのやり取りを何とかやり過ぎて、「明け
て七日、憧れの台湾に足跡を印す事が出来た。雨の中を一路台北へと、港基隆には一瞥も
与へず立去つた」[誌 28: 416 (33期1936)] というように、ほかには目もくれず一路、台
湾の主都たる台北に向かうものもあり、例えば基隆からであれば小一時間の汽車の旅で台
北に到着した。「北投圓山を過ぎて夢にも憧れてをつた台北に着き」[誌 10: 460 (14期
1916)]、「汽車は間もなく大きな都会に到着した。台北だ」[誌 6: 326 (10期1912)] と記
されているように憧れの都会台北に着いても、やはりそこは見知らぬ土地ゆえ、「台北停
車場にぬつと突つ立つた時には誠に心細い感じがした」[誌 13: 409 (18期1920)] という
ように不安な気持ちも覚えるが、「先輩の出迎を受け」[誌 11: 375 (15期1917)]、「幸ひ紀
君及栗山君出迎へ呉れ、やつと野宿もせず私の行く所は何処ですと聞き歩かんでもよい
と、ほつと一安心した、かく先輩を捕へて見れば俄に胆が大きくなつた様な気がした」
[誌 13: 409 (18期1920)]、「台北の停車場に着いた時には堅い麦藁帽子に長いセルの袴を
着けたにわか紳士の〇〇君が馬鹿にすまして角帽の不二さんを連れて出迎へに来てくれ
た」[誌 10: 457 (14期1916)] という記述に見られるように、書院の同窓生をはじめとす
る先輩・友人に出迎えられて、彼らの台北滞在が始まるのである。

また、台北駅は到着、見送り⁶⁾、出立の場面などで『大旅行誌』のなかに度々登場する
が、いずれもあくまで思い出を語る一つの場面として登場するのであって、建物としての
描写は現れない。

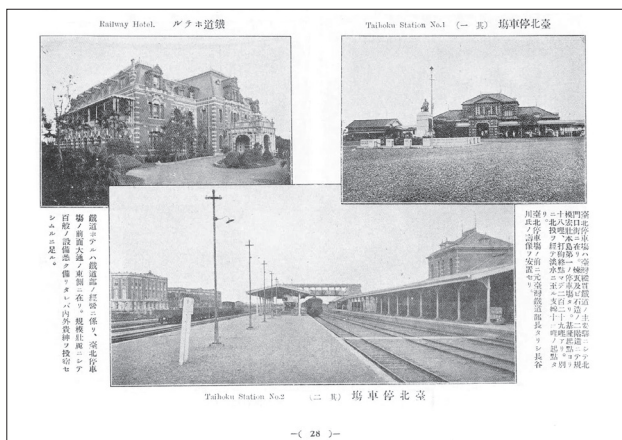


写真1 村崎長昶(1913)28頁⁷⁾

6) 「可して私は其日の正午の列車で帰国する森沢兄をステーションに送つたのであつた」[誌 9: 166 (13期1915)] の記述など。

7) 当時、写真帖による記録はかなりあり、本稿に掲載した村崎長昶(1913)『台北写真帖』のほかにも、台湾総督府総督官房文書課(1908)『台湾写真帖』、葛西虎次郎(1911)『台湾風景写真帖』など多数ある。

4.3 台北の概況に関する記述

台北に到着すると、台湾島内の他主要都市などと比較したり⁸⁾、例えば、「台北は城内、大稲埕、万華の三市街より成つて居て、以前は相離れて独立した都市であつたのが、各発達膨張の結果相融合しなほ発展を続けて今日の大台北市となつて居る」[誌 25: 468 (30期 1933)] のように台北の市街形成の概況を記している場合が儘あり、「台北は台湾総督府のある処で市街を旧城内、艋舺、大稲埕の三つに分ち其西を淡水河が流れて淡水へ注いで居る」[落合昌太郎 1915: 278]、「市は基隆の西方約十八哩、淡水河に臨んだ広大な盆地の中心にあつて、全島の政治、教育、経済等の源泉となつて居る。もと市は城内、大稲埕、艋舺の三部からなつてそれへ政治区、商区及び河港として其特色を發揮して居た」[大阪市教育会 1923: 12] といった同時代の旅行記の記述ともほぼ共通する。

「大台北市の膨張を見るにその西方は、淡水河の水面に限られて居るから、主として東北南の三方面に発達しつゝあるやうである。先づ北方に於ては鉄道線路を越へて、城内の北に接し建成町、御成町の市街、大正街の住宅街が発達し、米國領事館も此の方面にある。東方は基隆街道に沿ふて樺山町、東門外に東門町起り、台北州庁、台北市役所、中央研究所、医専、高商等が此の方面に集つて居る」[誌 25: 468 (30期 1933)]、「建築物、道路、街路樹、公園、納涼会、女車掌、都会人女、場末、花柳病、病院、美容院、貧民窟、邸宅、工場、会社、重役、労働者、官吏、そしてブルとプロと。総ゆる近代的な文化の感覚と神経とを具へてる都会」[誌 23: 358 (28期 1931)] など、市街のランドマークと街の風景を構成する様々な要素を挙げる記述が見られる。こうした客観的事実を列挙した記述は、同時代資料と内容的にほぼ共通している。

4.4 台北の街並み・街の風景・インフラの印象

台北のインフラについて、書院生は何に注目したのだろうか。役所が発行する公式記録、例えば台北市役所(1930)『台北市十年誌』では、第十一章「公共施設」に公園、動物園、運動場、水泳場、公会堂、第十二章「土木水道」には市区計画、道路橋梁、市民家屋建築、河川護岸工事、上水道、下水など、第十三章「交通」に市営乗合自動車のことなどが記述されており、とくに道路については156頁に「市区改正に依る市街道路は砂利道路延長五八、〇九〇間 タークレー道路延長六七〇三間 郊外道路延長二八、八八七間 総延長九三、六八〇間此の面積四三〇、五七九坪に達せり」との記述がある。とくに旧城壁の

8) 例えば、「台北の政都たるに對し此の地(台南:筆者注)は商都の觀を呈してゐる」[誌 22: 269 (27期 1930)] などといった他の主要都市との比較が見られるが、「台北は本島の北部に偏してはゐるが、首都である、台南は又南に偏つてはゐるが、鄭成功以來三百年間の旧都である。台北が内地式乃至歐米式であるの對し台南は支那式純台灣式とも考へられる」[大阪市教育会 1923: 48] などと共通するところが多い。



写真2 『台北市地図 (大正九年市制施行当時)』(1920)
の三線道路 (右半分) 掲載部分

跡地に通された「三線道路⁹⁾」は特筆すべきもので、同時代資料でも、観光案内なら「昔の旧城壁は城門を残して全部撤去せられ、その跡は三線道路と称する緑の大道となつて市街をまはり、市内は煉瓦又はコンクリートの三層楼が軒を並べ、各街路に面して台湾特有の亭仔脚を作りアスファルトの道路が縦横に走り、近代都市としての面目を備へてゐる」[鉄道省 1934: 70]、また紀行文なら「城内の名の起りであつた城壁も全く取り毀たれて其跡は三條の広大な車馬道となり、特に三線道路と称へられて居る。非常に幅広いアスファルト街路の両側にピロウやガヅマル等の街路樹が行儀よく、然も気持よさそうに緑の枝を延ばして居る様は、到底内地の都会では見られぬ美観で両側の家から一様に街路に突き出て居る亭仔脚と共に一見南国の特相を語るものである」[大阪市教育会 1923: 12-13]、「台北市街の旧城壁は楼門を除くの外全部取り払はれて、其敷地が、台北人の自慢する三線道路として市街を取り巻いて居る、此道路の内部が城内と称し一等地だ、東京ならば麹町区と云ふ格で内地人の居住地と官庁等である、又其内に商業区域、官衙区域、官舎区域

9) 鉄道部 (1937) 『台北とその附近』の沿革には「城内を圍ぐる城壁を撤去して其の跡に三線道路を設け全く市街の面目を一新した」と記述されている。

に細別せられて居る」[篠田次助 1931: 19] というように必ずと言って良い程に取り上げられている。

(1) 道路と市街の区画

書院生による記述も例外ではなく、インフラに関するもののほとんどは道路とその周縁に関するものと言ってよい。「街路樹の棕櫚とアスファルトには南国の太陽が訪れてゐたセーラー姿の女学生、スマートな娘さん、威勢のいゝ人力車夫白服のサラリーマン、鈴声を電波するバスガール」[誌 24: 445-446 (29期1932)] と記される南国の明るい雰囲気にもまして、書院生が注目したのは、「第一に目のつくのは道幅の広く面も平坦なことである。その総督府をはじめ諸官衙学校病院などのある方面は驚く計り道路の設計が雄大で何となく気宇の広闊なるを覚える。その最も壮麗なる府前街府中街文武街などは大道坦として四通八達し大廈高楼軒を連ね泰西日清の百貨店頭に堆いといつても誇言でない」[誌 5: 374 (9期1911)] という記述に象徴されるような、広くして平坦、井然と四方に通じる道路とその周縁の風景であった。また、道路に関連した記述では、以下に挙げる幾つかの例のように、先輩の作文を後輩が参照あるいは拝借したような痕跡も見られ、ある種の学生の作文らしさを醸し出しているとも言えよう。

市区の整然とアスファルトの美観だ、広い立派な道路とそうして一定のル子ツサンス式といふ様式と三階以上といふ制限とを備へた心もちのよい建築と夫れは到底東京の真中にも求め得られない者である [誌 11: 205 (15期1917)]

市区は整然として、アスファルトの大道が四通八達し其両側には規則正しい同型のル子ツサンス式の建物がずらりと並列しておる所などは、上海香港でも見られない [誌 12: 299 (16期1918)]

布区整然……としてアスファルト路は四通八達し其の両側にはル子ツサン式の建物が並んでゐる所などは、一寸他処には見られない景色である。市内には諸々に公園有り噴水あり、以つて遊子を楽しめ、一日の労を医するに充分である [誌 15: 685 (20期1922)]

台北の街は全然新設市街の色彩に染められた街だ。台湾の首都だけに誠によく完備されて居る。市区の整然たる■(筆者注:文字不鮮明)「アスファルト」を敷きつめた広い立派な道路が四通八達して其の両側には「ルネツサン」式の心地良い建物が並んで居る所などは到底東京の真中でも求められないものである。[誌 16: 525 (21期1924)]

(2) 亭仔脚

台北では新市街建設に際して、道路沿いの建物からせり出した“亭仔脚”なる庇が設置されていたが、当時、台北に赴任した職業軍人の篠田次助は「市街地の家が街路の歩道の上迄伸ばし通行人は直射日光を避け日蔭となつて居る処を歩く様な設備であつたことは熱

帯地の経験上定められたと感心した、越後の長岡辺りは冬の積雪の際に通行を容易ならしむべく、軒下を長く出してある、暑いと寒いとの差はあるが要領は同様だ」〔篠田次助 1931: 17〕と記している。一方で書院生は「台北の街は、何処か大連と共通味を持つてゐる植民街である。しかも南国風に明るい。香港のそれに似て、大通りの人道は軒下を貫いてゐる」〔誌 20: 51 (25期1928)〕、「台北の街は南国に相応はしい亭仔脚の設けてある所暑熱を防ぎ不時のシャワーに備へてあるので好都合である。殊に本町通りは道路に広く建物も頓整して居て、全く日本気分」〔誌 21: 442 (26期1929)〕というように、大連や内地との共通点を見いだしつつ、南国特有の気候を考慮したこの設備を有する街並に親近感を表している。

(3) 衛生について

亜熱帯の未開地の開拓・開発には衛生も重要な課題であったが、台北市役所観光係(1938)『観光の台北』が「内地の一般の人は今だに猛獣毒蛇が横行しマラリヤ蚊が年中飛び廻る未開なアフリカのジャングル等想像する人が少なくない。全く認識不足と云はざるを得ない。現在の台北は猛獣毒蛇の居るのは動物園位のものでマラリヤ蚊等も其の姿を見る事の出来ない程衛生設備が完備し、文化設備の点では全く内地の一流都市と比肩して毫も劣るとは思はれない寧ろ優つて居る位である」と記すように、すでに台北は一般的な内地人が想像するような未開地ではなくなっていた。「今日では土匪や生蕃や、マラリヤや、毒蛇よりも腸チブスが最も危険である」〔篠田次助 1931: 20〕という記述が示すように、危険なものも変化していた。すくなくとも台北については、書院生も「新領土だけありて新知識を輸入して新規模でやつてあるから諸般の設備が意外に進歩して居るのは驚くの外はない。瓦斯電燈はもとよりその上水及下水の完備せること」〔誌 5: 375 (9期1911)〕や、「掃除の行き届き百般の衛生施設の備つて居ること、台湾といへば直にマラリヤ熱を聯想し甚だしき瘴癘蚤雨を想起して薄気味悪く思ふ内地人に見せたきものである。今は市街地では瘴癘などは思ひもよらぬ事でマラリヤの蚊も今は内地深く行くに非れば見出す能はずとは研究所の技師の話である」〔誌 5: 375 (9期1911)〕という記述に代表されるように、当時の代表的な都市と比べても遜色のない先進的な都市となっていたと認識している。

その他、書院生による記述は、台北は美しい公園、図書館、博物館、市の美観を助ける銅像、マーケット、さらには「当局が苦心と決断を誇つてゐる開渠の下水」〔誌 11: 205-206 (15期1917)〕も備え、「その苗圃博物館の完備せること農事試験場専売局の整頓せること要するに台北は最新式の市街地としてその文明的設備を有する点に於て大に誇るに足るものありと云ふに躊躇しない」〔誌 5: 375 (9期1911)〕、「人口も比較的少なく土地も広くない台北には電車こそないが文明の都市として恥かしくない程都の設備は完全してゐる」〔誌 11: 205-206 (15期1917)〕、「兎に角文明の都市としては恥しくない設備を有して

おる、無いのは電車自動車馬車位」[誌 12: 299 (16期1918)] なレベルに達していたとの見解を示しているのである。

4.5 どこに泊まったのか

当時の宿泊施設については、例えば、村崎長昶 (1913) 『台北写真帖』には数ある建築物、名所と並んで、宿泊施設の写真もあり、㊦旅館部・日の丸館・朝陽号の掲載頁の説明書きには次のような紹介文で主な施設が挙げられている。

鉄道ホテルノ外台北ニ在ル重ナル旅館ハ北門街ノ日ノ丸館、府前街ノ朝陽号、一丸館、南洋商会、府中街ノ㊦旅館部、台中館、府後街ノ萬屋館、台北館、石坊街ノ山梅館、二葉館、松浪旅館、小南門街の依姫館、撫台街ノ朝日館、新起街ノ山城館、新起横街ノ和泉旅館等ナリ [村崎長昶 1913: 40]¹⁰⁾

また、旅行記・紀行文にも宿泊施設に関連した記載はあるものの、例えば鉄道ホテルでの台北商工会議所主催の午餐会に参加したり [井上忠雄 1927: 30]、台北ホテルに宿泊し、鉄道ホテルでの台北官民の歓迎会に参加したり [徳富猪一郎 1929: 15, 27]、概して高級志向である。では、書院生たちは台北滞在中にどこに宿泊していたのか。

台中館に投宿 [誌 6: 326 (10期1912)]

一丸旅館に投宿 [誌 15: 685 (20期1922)]

車中で台南放送局の某氏に紹介された駅近くの日の丸屋に落付いた [誌 24: 445 (29期1932)]

10) このうち、『大旅行誌』で書院生が宿泊先として明記しているものと一致するのは、鉄道ホテル、日ノ丸館、一丸館、台中館の4軒である。このほか観光案内でも宿泊先一覧があり、台湾博覧会協賛会 (1935) 『台湾の旅』には「鉄道ホテル、吾妻、日の丸館、朝陽号、萬屋、花家ホテル、摂津館、台北ホテル、太陽館、新高旅館、鶴家旅館、明治旅館、松浪旅館、一丸旅館、台北館、大丸旅館、朝日館、大和館、山梅ホテル、肥後屋、日乃出旅館、常磐館、寿旅館、小林旅館、集英館、進興館、永楽ホテル、高義館ホテル、千代館、台湾ホテル、大世界ホテル、嘉義閣ホテル、金山館、醒溟ホテル、福井館、四川館、大東ホテル、台南館、日英館、興仁館、大平館、福德館、東南ホテル、蓬萊ホテル」の44軒が挙げられ、鉄道ホテル、日の丸、一丸の3軒が一致する。台湾総督府鉄道局鉄道部 (1937) 『台北とその附近』には「台北鉄道ホテル (表町)、日の丸 (明石町)、朝陽号 (表町)、吾妻 (表町)、萬屋 (表町)、花家 (本町)、台北ホテル (本町)、新高 (本町)、太陽 (本町)、台北館 (表町)、鶴家 (表町)、明治 (本町)、一丸 (本町)、松浪 (榮町)、朝日 (大平町)、大和 (大和町) 永楽ホテル (永楽町)、高義閣 (下奎府町)、台湾ホテル (建成町)、大世界ホテル (大平町)、山梅ホテル (榮町)、台南館 (建成町)、大東ホテル (建成町)、嘉義閣 (建成町)、金山館 (大平町)、醒溟館 (建成町)、日英館 (大平町)、蓬萊ホテル (建成町)」の28軒が挙げられ、同じく鉄道ホテル、日の丸、一丸の3軒が一致する。

父の紹介で鉄道ホテルに泊る。台湾第一のホテルだ [誌 25: 468 (30期1933)]

観光案内に挙がるような名のある施設に泊まることも上記の如く散見されるが、かなり例外的で、例えば父親の紹介で最高級の鉄道ホテルに投宿してしまった場合などは、当然「ふところの寒いこと。上海を発つて以来二十二日目。旅費のなくなるのも無理はない」[誌 25: 468 (30期1933)] といった手元不如意な悩みがつきものであった。初期には先輩の周旋で北門街の某旅館への宿泊を記述していたり [誌 5: 374 (9期1911)]、また、三橋屋なる旅館への投宿が散見される年度もあるが¹¹⁾、以下の記述にあるように総じて先輩、知人、友人のつてを頼っている。

直ちに西君宅へ車を飛ばした (中略) 其後数日間は御厄介になつて [誌 10: 460 (14期1916)]

正午台北着、南新吾殿の邸宅に請ぜられ台北滞在中御厄介になる事となる [誌 12: 284 (16期1918)]

このように台北出身の書院生の実家や知人宅に厄介になっているが、台北出身者の場合、「自動車賃を奮発して、家に急ぐ、お袋が細長い白い顔を出す。まあ早かつたね！ 一行五人？ まあ大きな人達ばかり揃つて来たね」[誌 22: 266 (27期1930)] というように一行揃つて実家に泊まっている。上記「西君宅」の続きには「母君の心尽しの歓待には遠慮としては知らぬ僕も恐縮する許りでどうしても他所の家といふ感じはしなかつた福州辺の旅舎の事ども思浮べて金銭にて求め得らるゝ情の如何に冷かであつたかを思はずには居られなかつた」[誌 10: 460 (14期1916)] というように大陸滞在中の宿泊と対照的に記述した例も見られる。また、先輩の勤務先の施設にも泊まっている。

栗山、紀両兄の御出迎を受けて台湾銀行合宿所にお世話になる [誌 13: 266 (18期1920)]

早速東洋車の上にふんぞり返り台銀の住宅に身をくつろいだ時の気持たらない [誌 13: 409 (18期1920)]

今春卒業の台銀室田氏の案内で、台北から電車の様な汽車で台北十万の市民の慰安の地北投温泉に向つた。台銀倶楽部に御厄介になる。[誌 17: 233 (22期1925)]

11) 第15期生に「先づ三橋屋に乗込むで先発の三人に会つた」[誌 11: 205 (15期1917)]、「上陸台北の汽車に乗る。十時着。三橋屋に投宿」[誌 11: 285 (15期1917)]、「三橋旅館に入る」[誌 11: 375 (15期1917)] などの記述があるが、同旅館の所在等の詳細については今後の課題としておきたい。

大方の書院生にはお金がないから、こうして先輩・知人を頼るのであるが、なかには見込みの無いままに台北に到着し、「台北では、同窓名簿を繰り〜しよぼ降りの中を尋ね〜て、全くくた〜に成つた所でやつと尋ね着き梶原氏なる門を叩いた。と同氏は御婦人の発熱の為重松氏宅へ行つてくれ、相談してあるとの由、踵を反して一足違ひで留守にぶつつかる所を門口で、とつつかまへたとは失礼かも知れぬが幸間に合ひ、召じ入れられてやつと腰を下ろし、一しきり先輩の思ひ出話を傾聴し、後台湾総督府専売局倶楽部に案内され其処で厄介になる事となつた¹²⁾」[誌 28: 416-417 (33期1936)] という強者もいて、あても無く台北に到着し雨のなか同窓名簿を頼りに世話になれそうなところを探して廻る涙ぐましさが垣間見える。

4.6 癒しの場としての温泉

台湾は温泉が多く、同時代の観光案内では台北近郊のそれとして天母温泉、草山温泉、北投温泉、金山温泉、烏来温泉などを挙げている¹³⁾。台湾総督府鉄道局鉄道部(1937)『台北とその附近』は、草山温泉に18行、北投温泉に36行を費やしており、両温泉が中心的な存在であったことが分かる。『大旅行誌』には、蕃社見学のついで深山温泉の記述が

12) 滬友会(1955)所収「東亜同文書院・大学部・専門部卒業生並に在籍者名簿」の当該33期生以前にあたる1期生から32期生までのうち、梶原姓は19期生の梶原謙一氏と26期生の梶原英三氏の2名であり、重松姓は26期の重松敏夫氏と31期の重松保徳氏の2名である。同名簿を掲載する滬友会(1955)『東亜同文書院大学史』の31期生の項には卒業後の進路についての記述があり、梶原英三氏は「味之素(大阪、台湾、奉天)引揚後味之素、ますや、現蛇ノ目ミシン取締役」、重松敏夫氏は「満鉄、国際運輸重役、引揚後太陽化学研究所(福岡県)」とある。なお、国際運輸は戦前大連にあった会社である。また、滬友会(1982)『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌一』には各期に銘々伝があり、それによると19期の梶原謙一氏は「梶原謙一(長崎)台湾総督府専売局に入社。戦後有明村役場に勤務」とあり、26期の梶原英三氏は「梶原英三(香川)長春商業、味の素、ハルピン・奉天・大連支店長。戦後満洲屋社長、蛇の目ミシン部長、三光ミシン専務、蛇の目ミシン顧問。柔道・相撲部の世話役、共済部幹事」とある。また、26期の重松敏夫氏は「重松敏夫(福岡)平壤中学。満鉄鉄道部、一時各地方の治安工作に当たったが鉄道運輸に終始。大戦勃発時ハルピン監理所長、国際運輸支社次長、食糧の対日輸送に活躍。戦後豊国学園事務局長等。食堂等寮生活改善に献身、自治会名委員長で学内の信望を集めた」との記述、31期の重松保徳氏は「重松保徳(福岡)ハルピン電業局勤務。引き揚げ後福岡通商局、宮崎企業局を経て宮崎県公営企業協会常務理事、事務局長」との記述がある。滬友会(1982)に記述された経歴からみて、文中の梶原氏は19期生の梶原謙一氏の可能性が高いと思われる。また、26期重松敏夫氏、31期の重松保徳氏はいずれも主に満洲で勤務しており、26期重松敏夫氏には「一時各地方の治安工作に当たった」との記述があるものの決め手に欠くが、いずれにしても二氏のいずれかであると思われる。この引用箇所のように、随所に書院の卒業生、教員OBの氏名(名字)が出てくるが、各人物の特定については今後改めて調査することとした。

13) 朝日新聞社(1933)は金山、北投、草山、烏来の4件、鉄道省(1934)は北投、草山、烏来の諸温泉、台湾博覧会協賛会(1935)は台北州のそれとして北投、草山、礁溪、員山、烏来、金山、土場、台湾総督府鉄道局鉄道部(1937)は、天母、草山、北投、金山、烏来、台北市役所観光係(1938)は天母、草山、北投、金山、烏来を挙げる。

あったり¹⁴⁾、草山温泉については「和服を着た台湾人が流暢な日本語を操り日本人と仲よく話して居る点など植民地に稀に見る麗はしい風景である。総督府は植民地に活動せる人士を慰むべく巨額の金を投じて娯楽機関を設置してゐる。草山温泉も其の一つで内容外観実に申分のない」のように詳細な記述もあるが〔誌 24: 446 (29期1932)〕、書院生は台北に滞在した場合は、「翌日は西君の案内にて北投の温泉に浴す」〔誌 11: 285 (15期1917)〕、「温泉場で湯上がり姿で飲み暮し、大語し」〔誌 11: 285 (15期1917)〕、「北投温泉にて一日の清遊に三伏の苦熱を忘る」〔誌 12: 285 (16期1918)〕、「北投温泉に征塵を洗ふ」〔誌 13: 267 (18期1920)〕、「昨日から此の北投に来て、湯に浸りながら旅の憩ひをなして居る」〔誌 25: 462 (30期1933)〕のように、かなりの割合で北投温泉を訪れており、北投温泉に関する記述が圧倒的に多い。

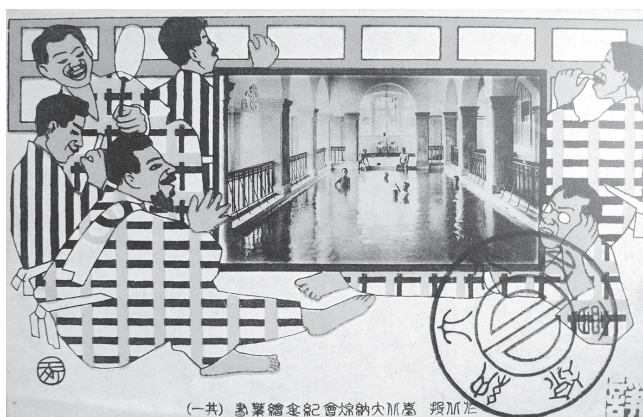


写真3 北投温泉博物館展示・絵はがき

大阪市教育会（1923）は16頁で北投温泉を「淡水鉄道、北投駅の北五町台北から三十分程の所に北投温泉がある。草山に比べると掬すべき野趣には欠けてるが、設備に於て、其湧出量に於て将又交通の便なる点に於て箱根・熱海の温泉郷にも勝る程のものがある」という風に客観的に紹介する。『大旅行誌』にもこれと同様に「北投温泉たるや台北を去る約三里汽車の便ありて之れに頼る時約二十分にして達する事が出来る山高く緑茂りて気は清く谷間流るゝ細き流れは絹々として珠を弄ぶ如く聞ゆ之れ即ちラジウム鉱泉を含むものにして北投の賑を為すのも之れに頼るのである遠地近地の葉蔭に見江つ隠れつしてをる

14) 「台湾に稀な然も屋外の深水温泉に浸れる」〔誌 32: 319 (38期1941)〕、「深水温泉でゆつくり湯に浸つた」〔誌 32: 320 (38期1941)〕など。

のは即ち温泉宿であつて稍広き平地に公共浴場¹⁵⁾なる建物がある一日の浴客に対しては頗る便利なのである台北充満の人士が汗に汚れ一週日の疲れを日曜を待つて家族打連れ来り医すには充分である」[誌 10: 461 (14期1916)] のように、観光案内の紹介文的な淡々とした記述も散見される。しかし、絶対多数は温泉での時間を主観的に描写したもので、「台銀の倶楽部で過した一週間。旅の終末を告げるには余りに退屈な時間でした」[誌 23: 359 (28期1931)] という否定的な記述が1例ある外は、概ね温泉での憩いや楽しさを語るものである。

停車場から四五丁で公共浴場に達する階下の浴槽に身を浸して足を伸ばすと一時に旅行中の疲れが取れてしまふやうに思う階上の大広間へ上つて来て横になつて居ると自働ピアノが一隅から喰へ入る様な音をして曲を奏で、居る谷川の流れ絹々たる自然の音楽も又捨て難い何時しか吾身は陶然として極楽浄土の客とならざるを得なかつた醒むれば怪しかりし空の雨を誘ふて青葉打つ音又興多く時々しぶきて見えつ隠れつする向への温泉宿一幅の絵となり幽雅なる事は実に仙境も斯くやと思はるゝ位である一日にして帰るを惜しみし連中の多かつたのも無理のない事である [誌 10: 462 (14期1916)]

八日は朝早く北投へ向け出発、途中台湾神社に参拝して後ガソリンカーを新北投駅で下りて、台湾銀行の倶楽部で一夜を明かし百人風呂に浸り温泉気分を満喫した。前には温泉の作る小溪流を包んだ深山あり、その間に点綴する温泉宿あり、夜ともなれば裏山には梟の鳴くあり、詩人の詩を賦す代りに、一行は尺八を手にして一層幽雅な気分に入つたのだつた [誌 28: 417 (33期1936)]

『大旅行誌』に記された書院生の記述の多くが、温泉そのものの特徴を記す数多くの同時代資料と異なるのは、実際に温泉に浸り癒されるひとの体験や心情そのものが表現されていることであろう。詳しい発行年は定かではないものの戦前の観光絵はがきにも「北投は大屯山麓の一溪谷にある緑樹木鬱蒼たる温泉境で、臺北市に程近き郊外にあり、僅かな時間でこの泉郷の人となり得ることは臺北都人士の幸福である」と記され¹⁶⁾、旅行記スタイルの案内文でも「北投停車場に下車すれば北投の温泉あり、台北からの遊び場所として第一の処」[落合昌太郎 1915: 279] と記されるように、北投温泉は台北近郊で押しも押されぬ癒しの名所であった。書院生たちが台北滞在の折りにこぞって訪れ、「もう二三日、

15) 昭和十年十月版『北投草山公共浴場案内』によると同公共浴場の設立沿革は「大正二年六月公共衛生費支弁ニテ設立、大正十年四月州に移管ス」とあり、14期生の記述当時は設立3年目の新しい施設であったことが分かる。

16) 北投温泉博物館展示・絵はがき「台北観光北投入湯記念・麗しの泉郷」より。

北投の風呂に浴して見たい。而し。スケジュールは、私達の出発を余儀なくせしめた」[誌 22: 267 (27期1930)] のように後ろ髪引かれる思いで北投温泉をあとにしたのも首肯ける。とくに「西宏大な浴場に入つて泳ぐやら跳るやらして楽しむこと一時間」[誌 11: 375-376 (15期1917)] や「先づ汗と煤煙で真黒になつた身体を靈泉に浸して台湾の汗を流した。上つてから浴衣で主客十三人ビールの満を抜き、興につれて唱ひ躍る。此処は全く別天地だ」[誌 17: 233 (22期1925)]、*「午後北投の温泉に人間並に自惚れて磨き立てに行く、大きな醜男が掬ふて無邪気満々に遊び回るやらもぐるやら大騒ぎの一幕を演ず、それで少しは美しくなつた様な気がするから不思議だ」*[誌 13: 410 (18期1920)] の3つの記述に代表されるように、『大旅行誌』には温泉に遊ぶ様子が生き生きと描かれている。

4.7 台北市内・郊外見学のさまざま

台北とその近郊には実に様々な見所があった。例えば台湾総督府鉄道局鉄道部 (1937) 『台北とその附近』は総督府鉄道部による台北の見所案内の冊子であるが、冒頭に「総督府の高塔、白堊の博物館、精巧極りない龍山寺の建築、三線道路の並木、栄町、本町、京町、太平町通りの賑ひ、これ等のみが人口三十万を有する島都の全貌ではない。一步近郊に湯の香を尋ね、緑風を衝いて史蹟を探つて始めて大台北を視察したと云ふ可きである」との記述があり、見所として公会堂、台北帝国大学、台湾神社、劍潭寺、動物園、銭南護国禪寺、圓山公園、台北橋、城隍廟、大稻埕市場、西門町、龍山寺、淡水河畔、植物園、商品陳列館、建功神社、総督府庁舎、新公園、博物館、芝山巖、天母温泉、草山温泉、竹子湖、大屯国立公園候補地、北投温泉、淡水、角板山、紅毛城址、ゴルフリンクス、海水浴場、観音山、富貴角灯台、金山温泉、新店碧潭、烏来温泉、林本源庭園、石壁湖山圓通禪寺、中央研究所、専売局、同各工場、高商・高校、鉄道工場等の建物、さらに劇場、ダンスホール、土産品、旅館、ハイキングコースなどを紹介している¹⁷⁾。

また同時代の写真帖では、台湾総督府総督官房文書課 (1908) 『台湾写真帖』は、台北

17) 同じく観光冊子で、朝日新聞社 (1933) 『最新日本名所案内』「台湾地方」の項で、台北周辺の名勝旧蹟として、台北公園、龍山寺、台湾神社、淡水、新店碧潭、林本源庭園、角板山、新竹神社の8件、温泉場として、金山、北投、草山、烏来の4件を挙げる。台湾博覧会協賛会 (1935) 『台湾の旅』は、台北周辺の主なる観光地として、旭ヶ岡、クルーベ浜、淡水、新店碧潭、大屯山彙、平山 (以上台北州)、角板山、五指山、獅頭山、大溪 (以上新竹州)、北投・草山・礁溪・員山・烏来・金山・土場の温泉、台湾神社、建功神社、植物園、龍山寺、孔子廟、博物館、東西本願寺、淡水、ゴルフリンクス、北投、草山、新店、林本源庭園 (板橋)、烏来、圓山附近などを挙げる。台北市役所観光係 (1938) 『観光の台北』は、市内では「台湾神社、圓山公園、圓山運動場、劍潭寺、孔子廟、台北橋、城隍廟、永楽市場、北門、中央卸売市場、西門町市場、公会堂、商品陳列館、総督府、市役所、州庁、中央研究所、専売局、新公園、博物館、龍山寺、建功神社、植物園、南菜園、水源池、帝国大学、明石將軍墓、乃木將軍母堂墓」を挙げ、市外では「芝山巖、天母温泉、草山温泉、竹子湖、北投温泉、淡水、富貴角灯台、石門、金山温泉、八里ヶ浜、海水浴場、林本源庭園、新店碧潭、烏来温泉、角板山」を挙げる。

庁内については、台北市街全景、台湾神社と明治橋、台湾総督府と其公室、総督官邸と民政長官官邸、台北公園の児玉將軍寿像と台北城壁、劍潭山警察官招魂碑と錫口街土匪來襲の遺跡、台北停車場の今昔、台北郵便局と博物館、専売局と阿片・樟腦及煙草三工場、台北医院・医学校と赤十字社台湾支部病院、苗圃と農事試験場、国語学校、中学校と台北第二小学校、台湾銀行と台湾日日新報社、陸軍部と兵營、圓山公園眺望と淡水河岸、龜山発電所と古亭庄配電所及水道水源地、芝山巖学務官僚遭難碑と北投温泉、淡水港と英国領事館、枋橋林家の庭園の全20件を掲載している¹⁸⁾。

紀行文なら、徳富猪一郎（1929）『台湾遊記』の記述が詳細で、台北停車場、台北ホテル、総督官邸での晩餐会、台湾神社、明治橋、劍潭寺、三橋町の明石総督墓・乃木大將母堂の墓・大將夫婦遺髪碑、建功神社、植物園、龍山寺、鼓楼、蓬萊閣、大橋町・台北橋、博物館、病友訪問、西門市場、南門、新店、鉄道ホテル、図書館、中央研究所、台湾総督府、総督官邸、台北病院、水源地、台湾総督府中央研究所農業部、台北帝国大学、専売所、高木友枝翁の邸というふうに訪問先を訪問順に逐一丁寧に記している¹⁹⁾。同時代の各資料とは対照的に、前項の北投温泉を除くと、『大旅行誌』は「自由に市内見物を為す」[誌 12: 285 (16期1918)] や箇条書き的な「此日総督府医学校中学校水源地監獄署等を視る」[誌 5: 382 (9期1911)]、「台湾神社北投温泉水源地博物館等を一通り見尽した」[誌 9: 164 (13期1915)]、「雨中の草山、台湾神社、植物園、大学、三線道を車で走る」[誌 22: 267 (27期1930)] のような素っ気ない記述は例外としても、いわゆる見所について言及する対象はきわめて限定的である。比較的詳細な記述があるものは次の通りである。

(1) 台北病院

まず、台北病院は、徳富猪一郎（1929）が『台湾遊記』で2頁半の紙幅を費やして紹介し、32頁で「実に台湾の誇りである」と評価しているが、『大旅行誌』にも同様に同病院を評価して「完と美とを尽す台北病院を見学す、気候風土の良好ならざる植民地には是非とも這麼な医院は必要だと感ぜらる」[誌 12: 284 (16期1918)] という記述がある。その他2例はいずれも「無我夢中で台北病院に辿りつく、急性肺炎の診断を受けて入院した」[誌 21: 36-37 (26期1929)]、「南支港勢調査班の杉原君が（中略）本朝台北病院に入院せる」[誌 21: 443 (26期1929)] という入院に関する記述である。

18) 写真帖では、葛西虎次郎（1911）『台湾風景写真帖』もあるが、台北については「官幣大社台湾神社、明治橋、総督府官邸、新公園ノ全景、博物館土木部、台湾歩兵第一聯隊第一大隊全景、台湾歩兵第一聯隊第二大隊ヨリ」の12件を掲載している。

19) 大阪市教育会（1923）は総督府、台北州庁、台北市役所、博物館、専売局、林業試験場等の官衙や医専、農林等の学校、銀行会社等の建築物、公園水道等文明的の諸施設、台湾神社、芝山巖、大屯山の雪、草山温泉、北投温泉、淡水街などを見出しとして取り上げてコメントしている。井上忠雄（1927）『台湾へ』が言及するのは、台北駅、官幣大社台湾神社、勅使街道、商品陳列館、鉄道ホテル、専売局・同工場、博物館、総督官邸、東蒼芳と呼ぶ支那料理屋の各所である。

(2) 台湾神社²⁰⁾

台湾神社については、徳富猪一郎（1929）が極めて詳細に記述している外、落合昌太郎（1915）、大阪市教育会（1923）、井上忠雄（1927）、篠田次助（1931）もそれぞれ一定の記述がある。一方で、『大旅行誌』では、ごく一部に「台北神社に詣で、想を過去に寄せ、長くも白馬銀鞍に打跨り、細身の太刀取らせられ、軍中に立ち給ふ、殿下の御勇姿偲ばれ吾袖を搾りぬ」[誌 11: 285 (15期1917)]、「吾々一行は途中圓山にて下車して台北神社に詣る事とした。動物園を過ぎて程なく大なる鳥居を見る之れなん即ち畏多くも金枝玉葉の御身を以て自ら陣頭に立たせられ仇する蛮民を鎮め給はしも不幸病を獲て遂に神去り申せし北白川宮殿下の御霊を祀れる台湾神社である」[誌 10: 461 (14期1916)]といった北白川宮に言及するものもあるが、「十一日。雨中東洋車を駆つて台湾神社に参拝し次に博物館を観る」[誌 6: 326 (10期1912)]、「台北神社を参拝」[誌 12: 285 (16期1918)]、「時の過ぐるも知らで（温泉で：筆者注）遊び、帰途は台湾神社に詣で」[誌 11: 376 (15期1917)]、「正午北行して丸山公園に参指し」[誌 13: 267 (18期1920)]など概して移動経路を記すばかりの簡潔な記述が多い。

(3) 専売局と陳列館・樟脳工場

専売局については複数の記述が見られ、専売局長から総督府の対支事業、専売事業について説明を受けたり [誌 12: 284, 285 (16期1918)]、機関車パイオニア号の展示を見つけて上海を思い出したりするが [誌 22: 267 (27期1930)]、何よりも専売局の樟脳工場を見せて貰って「余りに強い刺戟で、息づまりそうである」[誌 21: 443 (26期1929)]、「雪とまがふ真白な樟脳の山、目も鼻も痛いばかりの香りであつた」[誌 28: 417 (33期1936)]というように刺激に戸惑う様子が鮮明である。

(4) 台湾人街に関する記述

紀行文「鉄道の発達した為に艋舺（現在は萬華）は大に淋びれて僅に昔の面影を留むるのみ」[大阪市教育会 1923: 12]、観光案内の「大稻埕（台北の商業区で全台湾の中心市場である。とくに米と茶の取引が多い。なほこゝは本島人の集つた所で支那風の生活風俗を続けてゐる。）、萬華（台北最古の市街で盛場である、劇場、映画館、カフェー其の他の享樂機関が集まつてゐる）」[鉄道省 1934: 71]と同様に、「大稻埕と艋舺とに足を踏み入れて見た。巡撫の劉錫傳が商業地域に定めた丈に、市政又自ら往時と現代の錯綜を感じ、一見商業殷賑地域たるを知る。本島の重要輸出品たる茶の取引は此の地に限られ、尚艋舺は往時繁盛を極めたが、今は基隆の殷盛に押されつゝある」[誌 22: 266 (27期1930)]といった概説的な記述がある一方で、「本島人街も一巡した。本島人街に来れば日本人町

20) 書院生の台湾旅行における神社に関する記述については『文明21』本号の加納寛論文「東亜同文書院生の台湾旅行にみる神社の位置付け」参照。

の清楚美麗なるに比し、上海の徐家匯であり北京路の延長である」〔誌 24: 446 (29期 1932)〕のように彼らの本拠地である上海に重ね合わせた特徴的な記述もある。

(5) その他市内各所

その他、市内の各所については、総督府〔誌 22: 266, 267 (27期 1930)〕(農業科、病院)、植物園〔誌 21: 443 (26期 1929)〕、博物館〔誌 12: 284 (16期 1918)〕、中央研究所〔誌 12: 284-285 (16期 1918)〕、監獄〔誌 12: 284 (16期 1918)〕、大稻埕三井製茶〔誌 12: 285 (16期 1918)〕に言及するものもあるが、いずれの場所についても1例もしくは例外的に2例あるばかりで総体的な印象を言えるほどではない。

(6) その他郊外・蕃社見学

先輩が経営する炭礦見学に言及したものもあるが〔誌 28: 417 (33期 1936)〕、『大旅行誌』では、台北郊外で訪問すべき場所の代表として蕃社が比較的多く記述されている。

台北庁から入山許可書を貰った二人は此日一泊の予定で蕃社行と出掛けた〔誌 9: 164 (13期 1915)〕

烏来の蕃社訪問を計画し、台北軽鉄の便により遙に霞む深山に無上の趣味を抱きて、蕃社に入る〔誌 12: 285 (16期 1918)〕

早朝から旅装を整へ乗合自働車に揺られて新店に着いた。台北新店間は約二里半である。入蕃許可証を受けて入山する〔誌 16: 525 (21期 1924)〕

未だ蕃地の見物もしないで未練がある〔誌 10: 462 (14期 1916)〕

北投温泉への関心の高さと比して、総じてその他の個別の事象に対する印象は些か薄いようでもある。また、台湾博覧会協賛会(1935)『台湾の旅』には、「台北の歓楽境」として、検番、料理屋、カフェー、ダンスホール、遊郭が紹介されているが、『大旅行誌』は正課の記録でもあるためか、書院生はこの方面についてはとくに記述していない。

4.8 『大旅行誌』の記述に見られる日本的なもの

日本の内地から台湾を訪れた同時代の旅行記・紀行文は、いわば内(ウチ)を出て外(ソト)を見ているためか、日本的なものに関する記述が見られないのに対して、書院生は外(ソト)で学んでいる身であり台湾に内(ウチ)を見いだしているような記述も多い。

台湾人の若い者は皆邦語を操る、一とかどの文明人なる是等の青年が内地人気取り和服をまとひ得得たる横着者も屢々見受ける、彼等は雑誌を読み小説に耽り、新聞に口を通すなど、余程日本化している〔誌 12: 299 (16期 1918)〕

殊に本町通りは道路に広く建物も頓整して居て、全く日本気分で、遠く赤道指して行

く旅の遊子二人にとっては特になつかしく感ぜられた [誌 21: 442 (26期1929)]

汽車弁当も米が米丈けに、内地のそれを思はせる [誌 22: 266 (27期1930)]

(西君宅で：筆者注) ヘルメット姿に書院の学生たるを察せられて導かるゝまゝに風豊かなる坐敷にて和服姿に換へた時の心持は是れも吾身かと疑はる程であつた [誌 10: 460 (14期1916)]

汽車に昇降する日本人の浴衣姿がとても懐かしい。台北迄の車中は邦人が多かつた [誌 17: 231 (22期1925)]

浴衣に下駄で散歩す [誌 5: 374 (9期1911)]

浴衣が短いかも知れんけれど、——間に合ふかしら [誌 22: 266 (27期1930)]

妹が起こしに来る。暁の上は又格別の味ひがある [誌 22: 267 (27期1930)]

これらの記述に見られるように、台湾本島人の日本語力と日本化、街並の日本的なこと、米の種類、そして和服、浴衣、下駄といった和装、そして何よりも畳というように、書院生たちはことさらに台湾に存在する日本らしさに懐かしさと安心感を表している。また、「台北の夜は美しかつた。官民合同の大提灯行列が盛大に催されるのを後に、吾々は船の都合上その夜九時の急行で南へ——と急いだ」 [誌 17: 232 (22期1925)] で語られる提灯行列も極めて日本的なものである。そして、娯楽も一種の日本的なものとして括ることができよう。基隆での市川小団次一座による『国定忠治』 [誌 9: 163 (13期1915)] や、台北市内での『佐倉義民伝』の観劇 [誌 10: 461 (14期1916)]、そして活動写真で四人の悪魔のサイレントの見物など [誌 22: 267 (27期1930)]、台湾で「日本」の娯楽を堪能した好例と言えるだろう。また「この亜熱帯気分に加ふるに日本的気分を加味しておる所は一種変態の風俗にして、日台折衷文明の産物である、日台文明の混血児たる台湾人の子弟は皆日本人を教師として、日本語を習ひ、各学科共日本の学校にて教え込むものと殆んど同じである」 [誌 12: 299 (16期1918)] という記述などは懐旧とは別物の「日本」を指摘した例と言えるだろう。

4.9 誰に会い、誰の世話になったのか

大旅行調査では、各地で活躍する先輩諸氏や現地の法人やそこに所属する人物からの援助・協力を受けたり、面会したりすることが多かったが、「日本」国内である台北も例外ではなかった。まず、個人的な援助・協力・面会に関する記述については以下のような例があり、個人名に言及しているものも多い。

正午過ぎ台北着栗山、紀両兄の御出迎を受けて [誌 13: 266 (18期1920)]

此夜吉村分部鈴木の諸兄の歓迎を受けた [誌 6: 326 (10期1912)]

今日は西君の母君から一同招待を受けた [誌 10: 460-461 (14期1916)]

僕等福建班六名に広西の後藤氏を加へて主賓七名に主人側は下田前教授、藤巻、古江、古川、大山、門脇の六氏にて淡水河を前に控へた吾等の坐敷 [誌 10: 460 (14期1916)]

夕食後龍口町のお宅に松田介三先生を、お訪ねすれば、相変らず元気で我々を迎へて下さつて、話しはそれからそれへと進んで懐旧談に花が咲いたのであつた [誌 21: 443 (26期1929)]

総督官房調査課に、先輩である小林氏をお訪ねすれば、色々と南洋に関する予備智識の部類に数ふべきものを与へて下さつたり、全課の方で最近南洋方面の視際を終へて帰られた方を紹介して下さい [誌 21: 442 (26期1929)]

台銀に先輩大島氏を訪ね、市中観光へ多大の便宜をあたへて頂く [誌 25: 468 (30期1933)]

九日夕方新竹駅より一つ手前の竹北駅で下車、陳先輩を訪れ一夜の宿を請ひ台湾料理の御馳走に与つた [誌 28: 417 (33期1936)]

これらの記述も含めて、大旅行中の当人及び当該年度生以外で、『大旅行誌』で挙げられている名前はそれぞれ年度毎に、第10期が吉村、分部、鈴木の各氏、第14期が下田前教授、藤巻、古江、古川、大山、門脇、三原の各氏に西君の母君、第16期が賀来専売局長、下田先生、南新吾、濱田、柳瀬の各氏に古川、森の二先輩、第18期は栗山、紀、古河の各氏、第26期が松田介三先生、小林、岡田、高須、郷野、宜保の各氏、第30期が大島氏、33期が陳氏である。面会はもちろんのこと、歓迎宴を催してもらつたり、情報提供、施設見学・参観、市内観光、宿泊先の斡旋、食事の提供などの援助を受けたり、先輩の経験談を拝聴したりしている。

また、法人や名前に言及しない複数名に世話になっていることも多く、その最たるものは以下の三つの例のように、鉄道パス・乗車券を与えられたことである。

善は忙げで早速鉄道部へ出頭色々交渉の結果計画見事成功して遂に台湾縦貫鉄道全線のパスを頂戴致しました [誌 10: 463 (14期1916)]

総督府鉄道部に至り乗車券の下附を得 [誌 13: 267 (18期1920)]

仲立班の加藤君及谷口君と共に鉄道部に全線パスの交渉に行く、幸に許さるやつぱり学生に限るわい [誌 13: 409 (18期1920)]

5. 台北の総体的印象の記述

ここまでは台北にまつわる個別の事象に対する記述の特徴について見てきたが、『大旅行誌』には台湾、そして台北を一つのまとまったイメージとして捉えている記述も多い。

台北は完全無欠の如うに見える、が然し静かに考へて見ると台北は身分不相応な服装を強制せられてゐる惨めな都市ではあるまいか、台北は商業の町ではない官吏の町である、徒らに外観の美と威容を整へる事にのみ汲汲として来た一般市民は内輪に火の車が廻転してゐる、売上の少ないのに立派な家に住まなければならない茲の商人には浮沈定まりない運命がある、余り広過ぎる道を前にした市街は人通が少く見えて活気の漲ぎつてゐる殷盛さを知らない、勢い物価は騰貴する、一般市民の苦痛や察すべしである [誌 11: 206 (15期1917)]

このような官僚支配に対する批判的な記述が1例あるものの、これを除けば都市としての台北に対しては概ね好意的な記述が多い。

台北は流石に大きい [誌 11: 205 (15期1917)]

台北は爽々しい都市である [誌 11: 206 (15期1917)]

僕は台湾滞在中に台湾は清潔なよく整頓した処だと思つた [誌 11: 376 (15期1917)]

私は台北市を見て、小巴里と言ふのを、惜しまない [誌 15: 685 (20期1922)]

近代的な大都会の空気が台北の空に漲つてゐる [誌 23: 358 (28期1931)]

其処は都会といふ概括的な観念で其処に存在する総ての事物と現象を律し去られ得る資格を持つてゐる [誌 23: 358 (28期1931)]

肯定的に捉えた記述からは、「新領土とは云へ既に領台後二十年何と云つても吾日本の地」[誌 10: 457 (14期1916)]である台湾にあって、「台北は台湾の首都丈け流石に宏大な市街である。新らしい市街丈け整頓して」[誌 6: 326 (10期1912)]おり、「全然新設市街の色彩に染められた町である日本人の都市経営として是以上を要求する事は出来ない位完備した町」[誌 11: 205 (15期1917)]にして、且つ「台北は数多くの見るべき場所がある台湾一の都、台北は何処へ持ち出しても、恥しくないだけの体裁を充分備へて居る」[誌 25: 468 (30期1933)] というような見解が示されている。

上述のように台湾の「主都」たる台北に対しては、ほぼ肯定的な評価に終始するが、台湾全体に眼を転じてみると状況は些か異なる。一方では、大陸の色彩とは異なる南国的色

彩に優れ²¹⁾、のどかな田園世界と共存する形で²²⁾、斬新かつ大規模で内地の消極主義では及ばない発展に言及しつつも²³⁾、「直感的に映じた台北、東洋車の清潔なる事、街並の整頓せる事及腰間に短剣を吊れる金筋の光の多き事僕は商業地ではないな！と思ふた」〔誌 10: 460 (14期1916)〕で「腰間に短剣を吊れる金筋の光の多き事」つまり官僚支配の現状を間接的に指摘する。また、この地の「暑いには少なからず閉口した」〔誌 11: 376 (15期1917)〕のは兎も角として、「美しい外貌を持てながら所々に其包み切れない惨めさを曝露して」〔誌 11: 206 (15期1917)〕、「内地の不景気風はこの地に迄飛火して、教員と云はず役人と云はず、商人と云はず、異口同音に「もう台湾は駄目です」と云ふ悲観的弱音を吐かしむるに至つた」〔誌 12: 298 (16期1918)〕、「内地人は頓に振るはず、本島人に根強く圧迫されてしまつてお役人でなければ巾が利かないと言ふ貧弱さである」〔誌 21: 444 (26期1929)〕など実に否定的な記述が次々に現れる²⁴⁾。また、書院生同士の次のような議論も記されている。

林君と大いに議論に花を咲かす、氏は官僚の台湾統治に関し大いに其弊を説く、一言氏の詞を借りんか下級官吏就中巡查輩に至る迄本島人に対しては私情に左右されて官権を濫用さるゝ事屢なりと故に封建時代の泣く子と地頭には勝たれぬと云ふかの俗諺の今尚台湾に適用せなるゝを見ると実に慨すべきならずや〔誌 13: 407 (18期1920)〕

都市としての台北に対しては総じて積極的に評価する傾向が顕著であるが、他方、植民地としての台湾全体については、「国際的な上海に育まれた我々（書院生：筆者注）の眼に映じた此の地は余りにも小さい存在」〔誌 21: 444 (26期1929)〕であり、『大旅行誌』の記述を書院生の見解の総体として考えた場合、商業という民間の活力よりも「泣く子と地頭には勝たれぬ」官僚統治の傾向が過ぎることに疑問を呈し、植民地経営の発展の過程と現状を正負両面から正確に評価することの必要性を主張しているようにも見てとれる。

21) 「大陸の如き広茫雄大荒涼壯嚴とか崇高とか云ふ著しい大陸的色彩はないが、幽巖美麗とか云ふ南国的色彩は遙に優ておる」〔誌 12: 299 (16期1918)〕参照。

22) 「水牛の可笑気なる、群なす驚の白き、夕顔の紫なる、胡瓜花の黄なる皆忘れ難し」〔誌 13: 266 (18期1920)〕参照。

23) 「台湾は新開地であるだけ総ての事業は斬新にして規模が大である。即ち学校も官衙も堂々たる建築にして、内地の消極的主義の及ぶ所でない」〔誌 12: 299 (16期1918)〕、「台湾の第一印象は奇妙な所なりの一句に尽く。内地とは様子全く異なれど矢張り親しみ易く原資の野に文明の斑点を落せる如し」〔誌 13: 266 (18期1920)〕参照。

24) このほかに「一体内地にゐて台湾に行く人を見ても解るではないか台北の町を一見すると其理髪店と煎餅屋の矢鱈に多いのに気が就く是れが台北の商人に落武者の意外に多い事を語る好材料である」〔誌 11: 206 (15期1917)〕などの記述もある。

6. 台湾の海外領（≒植民地）経営に関する記述

例えば、大旅行で南方ルートのハブであった香港はイギリスの植民地であったが、塩山正純（2014）でも指摘したように、書院生たちは『大旅行誌』のなかで「不毛の島嶼、不健康地、つまらぬ禿山」にすぎなかった南方の自然豊かな一島嶼を、わずか数十年で、上海に並ぶ東洋第一の都市たる「香港」として創造し得たイギリス人の英知、意気、努力に感嘆し、尊敬の念を記述していた。一方で、日本の海外領である台湾についても様々に言及している。

かゝる大々の市街建設は総督府の威力にして初めてなし得る快挙である吾等はこの光景を見て台北はひとり台北の首府たるのみならず他年太平洋の我利権拡張の中心地とならんと想像して無限の快感禁ず可らざるものがあつた [誌 5: 375 (9期1911)]
植民地建設には力と愛とが必要である。力は統一を意味し、愛は砂漠に建てられた丸木小屋をも黄金の殿堂と化す。台湾は此の意味からして申分のない植民地であつた [誌 24: 450 (29期1932)]

その視点こそ様々ではあるが、このほか「此発達が領台以来僅か十数年の間に成されたといふに至つては大に誇るに足る」[誌 5: 372 (9期1911)]、「歴代統治者の熱心なる努力の結晶として、現今の如き正備せる家屋敷に築き上げ（中略）日本が東亜の代表として見事に台湾経営の歩を進め亜細亜人のために気を吐いてこの断定を裏書したのは痛快事」[誌 12: 298-299 (16期1918)]、「治台政策の効果が今や台湾をして全くの安楽境と化せしめた」[誌 23: 105 (28期1931)]、「当局者の苦心に満腔の敬意を表する」[誌 23: 105 (28期1931)] のように植民地経営をプラス面からのみ捉えたこれらの記述がある一方で、以下のように、別の角度から言及したものも見られる。

歴代総督の虚栄と地質に適合しない欧米文化の強制執行とである。こう云つたとて解るまいが一度総督となつた者は自分の在職中何か後世に残る施設をしたいと云ふ淡い虚栄から今までの総督は必ず何か見立つ事をする其結果が経費の膨張となる民の苦しみとなる、それから其下役人が徒らに欧米文化を鵜呑みにしたのを民度に適不適を省みる余裕もなく強制したために民の苦しみを産むのである [誌 11: 206 (15期1917)]

全体としては台湾における植民地経営のプロセスと現状を礼賛、肯定するような記述が多い一方で、決して礼賛、肯定一辺倒ではなく、割合としては多くはないものの、上記の

例に加えてさらに「台湾の様に原住民族が移住社会群より多人数なる場合には同化主義は困難である。如何に権力で強制したところで、彼等が本島人街実質的には支那街といふ地域を形成してゐる限り其処には当然根強い習慣性が遺憾なく發揮される」[誌 24: 446-447 (29期1932)]、「いくら同化主義を絶叫し台湾人に日本の教育を授けたところで先ず日本人に於て封建的なプライドを放棄せざる限り台湾をして平和な楽土郷と化すことは出来なだらう」[誌 24: 450-451 (29期1932)] といった現代的な常識とも合致する客観的事実の認識にもとづいて批判的な記述をしている例も見られることは重要な特徴であると言えるだろう。

7. まとめ

大旅行の台湾滞在は、「一体、台湾は旅をしても、そんなにいゝ所とは思へませんでした。尤も、四、五日で見て廻つたせいもありませうが」[誌 26: 220 (31期1934)] という記述に見られるように、概して短く“走馬看花（大雑把に物事の表面のみを見る）”的であることが少なくなかった。また、書院生たちは、本来の大陸での大旅行の苦難とは正反対の安穩とした滞在について、「大名旅行から生れる皮相の見解しか持ち得なかつたことを考へ合せて呉々も遺憾」[誌 24: 451 (29期1932)] とも記している。岩田晋典（2015）に「台湾は、つねに「日本」を味わうための訪問地として選ばれたのではなく、そのときの政情によってやむを得ず選択されたこともあった」とあるように、運悪く中国大陸や南方を廻れず諸事情で台湾にまわされてきたというのが、書院生たちの偽らざる心情であろう。また、上陸時の印象でも言及され、「こゝは、実に官吏の天国でして、官僚臭が漲つてゐるのです。それは台湾に入つた誰もが、直に感ずることだらうと思はれます」[誌 26: 220 (31期1934)]、「台湾ですね。あの税関吏の私達に対する態度。これで完全に気分をこわして終わりましたよ」[誌 27: 266 (32期1935)] という記述にも象徴されるように、書院生は官僚的なもの、ひいては台湾における官僚による統治に対して極めて強い嫌悪感をもっていたことが見てとれるのも事実である。

その一方で、記録全体から見えてくるのは、ネガティブな感想にもまして、「日本」的なものへの懐旧を肯定的に描く傾向である²⁵⁾。

此夜十時台北に帰着す、暫くの旅であつたが離れて居ると懐しい情が起る殊に知らぬ異境の一人旅は尚更である [誌 5: 382 (9期1911)]

25) 岩田晋典（2015）67頁も「台湾経験の4つのポイントの1つとしての、「日本」としての台湾」、「台湾を日本の一部に数える記述は少なくない」と指摘している。

久し振りに日本の汽車に乗り多くの同胞に接し窓外万物生々の山川を望んだ時実に親しい懐しい感がして恰も故山に帰つた様な気がした [誌 10: 457 (14期1916)]

文明の利器たる此の怪物（汽車のこと：筆者注）が何の苦情も言はず運んでおる窓から瞳を放てば福建にて見し山の緑と色は変らねど何となく親み多く緑樹の間に点綴する支那家屋も調和善く視江る庭前に戯れて居る小孩子如何に幸多き事であらう [誌 10: 459 (14期1916)]

台湾は何んと云ふても日本の地である。無数の日本人と日本の家を見て誠に懐しい親しみを感じる [誌 16: 524 (21期1924)]

台北の二週間の滞在は全く苦難の旅と云ふ気持が洗ひ流された様なのびへしたものだつた。ウライ幽境への清遊、北投温泉の静養、台北市内の夜の散策。台北は忘れられない町の一つとなつて僕の脳裏に深く印せられた [誌 23: 360 (28期1931)]

不本意な訪問にして、しかも出ばなで官憲、税関で嫌なイメージをもつものの、滞在を終えてみれば、「台湾の旅行も愉快だつた」 [誌 23: 360 (33期1936)] という記述に象徴されるように、総じて愉快的な滞在となっていることがその記述に現れた心情からも見てとれる。これは観光案内の客観的な記述や、本土からの訪問者の外（ソト）的なものの発見の記述とは異なる、書院生の記述の特徴であると言える。

そして思い出を記す際のたとえ話も、どこか本国の身近な文化を彷彿とさせるような特徴がある。北投で金がない中で過ごす場面を記した「然し僕等は『腹は空いても、ひもじゆうない』と千松のくさりを呻りながらトランプを打つてました」 [誌 23: 360 (28期1931)] などは、「腹は空いても、ひもじゆうない」は実は千松ではなく、主君鶴千代の台詞であるのはさておき、まさに当時の日本人なら誰もが文化として共有していた浄瑠璃『伽羅先代萩』御殿の場のストーリーなのである。

大旅行誌

『東亜同文書院大旅行誌』（雄松堂 2006 オンデマンド版）

参考文献・資料 出版年順

台湾総督府総督官房文書課（1908）『台湾写真帖』台湾総督府総督官房文書課

葛西虎次郎（1911）『台湾風景写真帖』沼田日進堂

村崎長昶（1913）『台北写真帖』新高堂書店

落合昌太郎（1915）『漫遊案内七日の旅』有文堂書店

大阪市教育会（1923）『台湾見聞録』大阪宝文館・東京宝文館

井上忠雄（井上江花）（1927）『台湾へ』江花会事務所

徳富猪一郎（蘇峰）（1929）『台湾遊記』民友社

- 臺北市役所（1930）『台北市十年誌』臺北市役所
篠田次助（1931）『台湾の思出』（非売品）
朝日新聞社（1933）『最新日本名所案内』朝日新聞社
臺北州（1935）『北投草山公共浴場案内』臺北州
台湾博覧会協賛会（1935）『台湾の旅』台湾博覧会協賛会
台湾総督府鉄道局鉄道部（1937）『台北とその附近』台湾総督府鉄道局鉄道部
台北市役所観光係（1938）『観光の台北』台北市役所観光係
滬友会（1955）『東亜同文書院大学史』滬友会
滬友会（1982）『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』滬友会
藤田佳久（2011）『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版
塩山正純（2014）『『大旅行誌』の思い出に記された香港』愛知大学東亜同文書院大学記念センター『同文書院記念報』23号別冊①（48-56頁）
岩田晋典（2015）「東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した「日本」」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』34号（61-76頁）
片倉佳史（2015）『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年 1895-1945』祥伝社
赤井正二（2016）『旅行のモダンイズム—大正昭和前期の社会文化変動—』ナカニシヤ出版